

【マティを偲んで : その教育者としての素顔】 (1987)

Margaret Rustin

マティ(Martha Harris)は、私の最も敬愛する師であります。彼女にどれほど私が啓発されてきたことか、懐かしく多々思い出されるのであります。彼女は類い稀な、すばらしい心の持ち主でありました。他者を理解するに“自分の心に深く沈潜され、そして常に‘情動的存在としての己れ自身 her own emotional being’との接触を図りながら、溢れんばかりの流麗かつ豊かな想像力を駆使なさっておいででした。そんなふうに彼女の教え子たちの誰しもが比類なき経験を与えられたのであります。すなわち彼女の懐深くしっかりと抱かれ、その眼差しに見守られながら、まるで赤子が感じたり考えることをし始める際に味わうところの、高揚して気分が舞い上がったり、恐怖でおののいたり、興奮でふるえたり、美にうっとり酔い痴れたり、或いは驚嘆し呆れるといったことにごく近い感覚ともいべき、そうした諸々の体験へと導かれていったわけであります。マティは子どもをそして人生をも深く愛し、かつ大いに愉しむことをご存知な方でしたし、さらには精神分析によって喚起されたところの《こころの早期の発達》への熱烈な探究心が相俟って、その指導力を発揮するうえで、彼女独特の誠実さ faithfulness が醸(かも)し出されていたものと思われまふ。そして、その結実として‘チャイルド・サイコセラピスト’と称されるわれわれが形成されたと言ってもよろしいかと思われるのです。

譬えて申しますと、愛らしい鮮やかな花々が色さまざまに入りまじり、輝かんばかりに咲き誇っている庭を見るようでありまして、しかもその花壇を縁取る草花たちはどちらかという何気なしにそこに植え込まれてあるようですし、勝手に大きくなったともいえそうな灌木があちこちに配置されてもいて、あまりにその景観が全体に自然ですので、一見するところ、いかにも園芸家が趣向を凝らしたところの、さぞかし手入れにはご苦労されたであろうといったふうには毫も見せないといった感じで、まさにそういった印象こそがマティなのだ、彼女の【タヴィストック】での仕事ぶりからしてしみじみと私は想うのであります。

彼女が最初に「タヴィストック・チャイルド・サイコセラピー・トレーニング」を統轄する立場に就いたとき、エスタ・ビックから教えられたパーソナリティ発達の精神分析的概念をどう維持するかという課題に直面しました。Mrs. ビックはメラニー・クラインに深く傾倒し、当時まだ発達途上にあつた彼女の思考をフォローすることにひたむきでありまして、技法上の妥協を知らない‘純粹性 purity’といったものに深く入れ込んでおられたわけです。【タヴィストック】内での各先輩諸氏の間で基本的路線において互いに相容れない見解の不一致がありましたから、その点を考慮しながらマティはそうした教えを存続させてゆくべき道を模索してゆかねばならなかつたのです。研修生にとっては学ぶためになんらかの護られた空間が必要でありました。そうしてこそクライン派のパラダイムとの格闘も可能でありましようし、さらにはより現代的な視野に立つての児童精神科医療並びにタヴィストック・コミュニティのメンタル・ヘルスのアプローチとの連携も可能だつたといえるのであります。この創造的ともいえる緊張関係 creative tension の名残を今尚もわれわれはトレーニングを考えるうえで引き摺っているといえるのであります。そして一つずつ個々の課題 the particular に専念してゆくことを通して、それぞれに学んだところの知識を統合させてゆくマティのやりかたはわれわれにとって最も有益かつ強力なモデルなのであります。

ミセス・ビックによって創案された《乳児観察法》を通して、乳児そして母親、それから他の家族との間の相互交流を研究することを、マティは‘精神分析的な教育なるもの’の枢軸として捉えておいででした。週ごとに、決して侵襲的ではない、規則的な家庭訪問をすることで、その家族関係における情緒的ないのちの親密なやりとりへの接近が可能となります。それら観察されたすべてについて詳細に描写されたものを討議するセミナーは、大概の研修生がマティの指導に接する初めての機会となったわけですが、それは実に驚嘆すべき体験であったのであります。研修生は、ふんだんに盛り込まれた馴染みのないディテールに大いに戸惑い、それは一見してなんら形も筋もない、まさにカオスといった様相を呈していることからそうなのですが、また己れ自身がそれに情緒的に深く関わり合うことのできる程度からしてもそうなのであります。マティのコメントは、家族それぞれの心の状態及びフィーリングについて利用可能なエビデンスが拾い集められそして結合されてゆき、参加者の誰にとってもその意味するところが深く記憶に刻まれるといった具合でありました。そして大概のわれわれがそれを耳にする迄はまるで気づくこともなかった情緒的な出来事 events を描写するのに、彼女は極めて普通にまさに‘地に足の着いた’、それでいて誠に心に響く言葉を用いられたのであります。その言葉の明快さおよび単純さは、マティの観察データの本質を鋭く突く、その弛まない集中力を反映しております。彼女の乳児観察について書かれたものをご覧になれますと、その独特に明澄なるスタイルを大いに愉しまれることでしょう。

彼女は、赤ちゃんの潜在する能力が徐々に顕在化してゆくこと、そして親たちにしてみても赤ちゃんに馴染んでゆきながら、それに伴い己れ自身の新しい側面をも体験してゆくといったことに深く興味を抱かれ、そのようにして魅了された思いをセミナー・メンバーの面々と共に分かち合う能力には殊更秀でたものがありました。それと同時に、研修生側の情緒的な反応、その不安感そして進歩といったことながらも控え目ながらマティの心の内にしっかりと掌握されていったわけでありました。われわれ自身としてもこうしたセミナーを通して彼女に自分が充分よく知って貰えたと感じられましたし、また同時に彼女がそのようにわれわれ個々人について得たところの認識の活用においても多大の信頼を寄せてゆくようになりました。と言いますのは、明らかに彼女はわれわれを一個人としてそしていずれ将来なるはずのセラピストの一人として見做し、そうした成長を促進させるべく愛情と思い遣り concern でもって個々人への理解が活用されていったからであります。このようにして彼女はわれわれに、家族生活という親密な内部へと踏み込んでゆくお蔭を得て、意識的及び無意識的な‘情緒パターン emotional patterns’に気づかされ、それで子どものパーソナリティがいかにして形成されてゆくのかを観察し得る、そのような‘恩恵 the privilege’をどのように体得してゆくべきかを示してくださったということになります。ここで殊にその特徴的なことをあげますと、まずは‘内側の要因のそれぞれの交錯 the interplay of internal factors’が大いに強調されました。すなわち母親そして赤ちゃんの気質といったもの、彼ら個々に固有の不安感に耐える能力、かつ情緒を表出する能力といったことなど。さらには外的な要因や偶発的な要因をも十分に考慮されました。すなわち、その最初の週の些か傷つきやすいともいえる母親をコンティンし、かつ手助けしてくれる誰かが身近にいてくれたかどうか、お産後の母子収容状態 confinement がどのように経験されたか、授乳状況を安定させるにあたって母親と赤ちゃんにいかなる障りがあったか、もしくはいかなる援助を得ることができたかといったことがらであります。多くの研修生に

とって、乳児観察に取りくむのとパーソナル・アナリシスの開始とがほぼ同時期に重なるわけですが、これらの組み合わせは、細やかな心遣いといったわりを込めてではありますが、マティが統轄する立場でそれぞれ個別に研修生と関わり合う分岐点となるものでありました。

チャイルド・サイコセラピストのための《pre-clinical training》から徐々に展開したところの現在の【Tavistock observation course】という形を取るに至る過程で、マティがもう一つ重要な眼目としたのが彼女のいうところの【Work Discussion】セミナーでありました。とても控え目でありふれているともいえる名称ですが、実のところ大いに創造的な概念であったということになります。こうしたセミナーの基本理念を考察するのに大いに役立ったといえる彼女自身の経験の一つが彼女の論文【Consultation project in a comprehensive school】(1968)に詳細に記述されております。非・臨床的な状況における児童の観察がいかに教師たちにとって有益かということにひどく心を揺すぶられ、そこで彼女はチャイルド・サイコセラピストとしてトレーニングを受けたいと欲する人々のグループを設けたわけでありました。そしてセミナーが開催されることとなり、それぞれ参加者は職場で見聞きしたところのものを記録した観察資料を持参してもらうということが求められたのであります。グループ・メンバーは多様な職種そして勤務状況 setting といったように、その背景はバラバラでしたから、互いに提供し合うものが実に盛りだくさんでありました。発表担当者は書き綴った資料を声を出して読み、思いつくまに考えを述べるといった方法が取られました。そこからさらに発表者とセミナー・メンバーとの間の対話が生まれ、いっそうの詳細が明確化され、そうした現場での情緒的側面の探索を大いに可能にしたわけでありました。すなわち、研究対象となっている子どももしくは子どもたちについて、その心の内側で気掛かり the inner preoccupation とされているもののイメージを想定してゆくこと。さらには担当者についても、それら子どもたちのコミュニケーションに対する意識的および無意識的反応をいっそう明瞭なものにしてゆくことであります。しばしば深刻な心的葛藤を抱えていたり何らかの支障を来している子どもたちと日々格闘していた人々にとってこうしたセミナーは実に大きな助けとなったのであります。そこに何らかの‘意味あるリンク meaning links’を探し出すことで、子どもたちの行動が理解可能なものとなりましたし、そうすることで幾らかでも子どもの混乱、不安、そして迫害の程度を緩和することができ、担当者自身の想像力そして希望を持てるといった期待感をも大いに解放させるに至ったということでもあったわけです。

こうした同じ主旨から、【タヴィストック・学校教師のためのコース】が発展してまいりました。そこでは学校教師たちの役割におけるカウンセリング的側面にウェイトが置かれております。そしてワーク・ディスカッション・セミナーは、他の多くのコースにおいても標準的なカリキュラムとされていったわけでありました。その概念は今振り返りましても実に明瞭至極で、もはやそれが無いことなど想像もできないわけでありますけれど、そもそもそれはマティの信念 conviction から生まれたのであります。すなわちそれというのは、‘精神分析的なスタンス a psychoanalytical attitude’ というものはコンサルティング・ルームに限らず、大人そして子どもたちの不安感やら葛藤を理解しかつ対処することがその場固有の発達の可能性にとって主要課題であるところではいかなる状況であろうと適用されて然るべきだといったことなのであり

ます。こうした発想の起点からして、家庭内で、学校で、そしてより広いコミュニティにおいてといった具合に、成長していく子どもたちを巡ってのそうしたすべての対人関係性に密着し、それらを研究対象としてゆくことが十分に価値あるものとされていったわけであります。

マティ自身が人を教え導くことを大いに愉しまれる方であったこと、それがため彼女のセミナーそしてスーパーヴィジョンは甚大なる悦びとして人々に享受されたわけですが、それはチャイルド・サイコセラピイ・トレーニングのいっそうの拡張へと導かれていった際の彼女の決断においては一つの重要な要因であったものと思われます。1970年代の初頭、【National Health Service】機構の改革があり、精神分析ならびにサイコセラピイへの関心が募ってきたこともあり、これらごくマイナーともいえる職業のリソースが底上げされ、かくして増強された養成プログラムの発足という運びに至ったわけであります。その結果、かなりの数の有資格者でかつ臨床経験のある応募者らがそれに参加する機会を与えられたこととなります。そこでマティの指導下でトレーニングを受けてきた人々もそれら教師陣に加わっていったわけであります。教師の一人として、研修生のパーソナルかつ知的な成長を見届けるといった特典 privileges に浴すことは、殊にマティの中では強く意識されていたように思われます。【観察コース the Observation Course】のセミナーは、コンサルティング・ルームでの個別臨床よりもいっそう広範囲に精神分析的な方法および知識が活用されるといった、多層的な可能性へと接近可能にしていたといえましょう。そうしたセミナーでは、研修生、彼らの同僚たち、共に関わった子どもたち、それに子どもたちの家族、それらすべての誰もが等しく貢献し合うところの参加者として体験されたのであります。

マティの民主的な感覚、パーソナルな包容力、驚くほど龐大な仕事量をこなす能力、そして精神分析的洞察が有するユニークな価値は可能な限り多くの人々に共有されて然るべきだといった信念、それこそがマティその人でありましたから、やがて彼女の身边に集うサイコセラピストの同僚たちも大いに感化され、さらなる挑戦へ向けて鼓舞されていったわけであります。彼女自身の果敢さ、仕事への献身、またそこから得られる幸福感が、‘官僚体制 bureaucratized organization’ といった勢力に挫かれることなく、そして大概の精神分析の指導者が慎重で、かつ多くの意味で伝統的な仮説に縛られている点なども一切顧慮することがあってはならないといった、彼女の並外れた決意を挺入れしていたといえましょう。振り返りますと、あの時期にあのような変革 this shift of gear が達成されたということ自体、今尚も息を呑むほどの驚きに襲われるのであります。

勿論のこと、彼女は実に広範囲に及んでよく人生に精通しておいでで、それらを誠に率直に語られる方でありましたから、そうしたお手本は誰にとっても甚大なる影響力があったといえましょう。彼女が教え子たちに与えたインパクトは、その精神分析的アイディアを披露するパワーに負けず劣らず、彼女という存在そのもの her being に由来しているといっていいいでしょう。彼女の研修生に対する態度は、真っ当に学びがそこで取り組まれていると感じられた場合にはということになりますけれども、興味を覚えることの深さそして並々ならぬ忍耐力が実に適切に組み合わせられたものであり、それと同時に、誰しも己れの不安感は直面しかつ耐えねばならぬといった堅固な信念がそこには加味されていたわけであり

ます。彼女は慰藉 reassurance が意味あるものとは信じてはいなかったものの、研修生が精神分析を学ぶことの厳しさに耐えるように援助するに当たってその心配りに余念なく、しかも個々に有する‘傷つきやすさ’というものを深く心に留める点では実に尋常ならざる能力を発揮しておいでだったのであります。彼女がよく言及することのあったお気に入りの一つが、ピオンのよく用いるキーツの《ネガティブ・ケイパビリティ negative capability》という概念（訳註；不確実なものや未解決なものを受容する能力）でありました。そして彼女の指導のアプローチとは、ピオンの思考の美しい模範 exemplification であったといってもよろしいでしょう。

マティの身近にいた同僚たちの多くは、彼女が人を判断するうえでいかに鋭敏かつ緻密であったことが、それらを深く記憶に留めておられることと思われまふ。そして多くの研修生にとってもまた、マティがその繊細な感受性でもって彼らの内に秘すところの‘創造的な火花 the creative spark’との接触を図ってくれたお蔭でどれほど豊かな恩恵を得たか知れないのであります。そうしたものは普段他の人の目には得てして見逃されやすく、なかなか理解されにくいものでありまふが、マティなればこそ、敢えてそれを捜し当て、そして慈しみ育ててくださったといえるのであります。

彼女がまだ職責をまっとうされておいでの際、その後半には文章を書き残すこと writing によりいっそうの重きを置き始めるようになられました。それで彼女自身もそのための時間をどうにか工面しようとして日々格闘していたことになりまふ。そして、こうした文章を書き記すこと writing の価値は、【タヴィストック・クリニック・サイコセラピー・トレーニング】において今やいっそう重要視されるに至っております。

彼女の著作論文集（1987,2011）が出版されております。それは、より広い読者層に対しての精神的教育的教育というものを考えるうえで実に傑出した貢献という意味で一つの公的な記録であります。そしてそれはまた、マティの古くからの友人そして研修生たちにとっては彼女との嬉しい出会い直しになるものでもあります。マティの論文を再読することはほんとうに大きな喜びであります。なぜなら彼女が言葉を使うその優美さのなかに、彼女の心がどんなふう働いているかが真実克明に描写されているからであります。複雑で錯綜したアイデアが単刀直入に語られておりますし、そうした文章からそれらアイデアが生まれたところの生の体験 the lived experience が生き生きと蘇ってくるのであります。

そうした彼女の秀でた傾向が濃厚に覗かれるところの、或る一つの短いエッセイをご紹介します。それは一般向けに書かれたもので、「同胞関係 sibling relationships」についてであります。ここ数年の間、精神分析の関心は新たに同胞関係に光が当てられ、幾つか出版物が出ております。そこには精神分析においてこのテーマはこれ迄には顧みられなかったものであるという指摘も含まれているわけであります。ところが、この1967年の論文（訳註：《Family Circle》）を読みますなら、それはマティの懸命な熟考の産物なのですが、いかにそうした見解が間違っているかを知ることでしょう！ 日常の家庭生活から覗かれるところの観察、それと深刻な幼少児の不安感やら子どものごく自然な発達のなりづのいずれにも纏わる精神分析的な理解が、‘親なるもののコンテインメント parental containment’

の中核的な機能とは何かを理解するうえで結び付けられ、さまざまに考察されているのであります。マティは、第一子の子どもが次に産まれた新しい赤ちゃんの訪れをどう感じるか、それを想像しながら深い同情を込めて語っておりまして、それは彼女の寛大で思いやりのある心を想起させます。彼女は、子どもの失望感(何といても最初の頃ですと自分が赤ちゃんに滅多には気づかれることはないでしょうから)、拒絶感、怒り、抑うつ感について記しております。その一方で同胞関係というものは、それが正直なものであればあるほど、そうしたアンビヴァレンスは不可欠な要因でもあるとも書き記しておりますわけで、また兄弟姉妹の間には生涯を通しての親密さそして友情すらも可能であると述べているのであります。同胞関係というもののこうした時空を超えてのさまざまなありようについて、それも社会的及び家族の構造にも掘りましょが、彼女は大なる興味を持って、歴史、人類学、そして文学を援用しながら、幾重にも熟考を重ねております。こうした彼女の教養そして関心領域の幅広さこそ、まだまだ己れが知らねばならないことがいっぱいあり、そしてさらにまだまだ検討を要する課題は尽きないといったふうになれわれ研修生の心を啓(ひら)いていったものと思われま。ここにこそ、マティが教育者としてまさに天才 genius であったとも言える由縁があるわけでありま。

マティの精神分析的指導者として、そしてスーパーヴァイザーとしての実際を振り返りますと、事実そこには彼女の弟子たちとの間に或る種の‘同胞’の絆にも似た強い結びつきが感じられるのであります。なんという幸運でしたことか。われわれ銘々が個人的に彼女に見知ってもらい、評価もしていただき、尊重されたということもですが、彼女があればほどにチャイルド・サイコセラピスト養成に精力を傾けていたあの当時自分が彼女の教え子の一人だったということが…。深い感慨に浸されます。そうしてトレーニング・コースに熱烈に身を打ち込むうちには、当然ながら新しい学期が始まると現れる‘新しい赤ちゃん’に対する極端な反応やら、破壊的な衝動を含むところの競争心もまた頭を擡げるといったことも起きてまいりましょ。しかしながら、最も肝心要なことというのは‘ワーキング・グループ’の一員になるという経験であります。そこでは優れてあたたかみのあるそして親密な情緒的な雰囲気において、ピオンの「ワーク・グループの倫理 ethic」を支えるべく格闘してゆくことなのであります。こうしたパーソナルなもの the personal とプロフェッショナルなもの the professional とを鼓舞しつつ統合してゆくことこそ、かつての1960年代および70年代に盛んとなり、より広い社会的背景の一部としてあった《個人的なことは政治的なことだ the personal is political 》といったフェミニストのスローガンのマティ流のバージョンであったともいえましょ。【タヴィストック】内でも彼女の際立った功績のおかげで、男女間の格差そして権威のバランスがシフトされてゆきましたし、そして児童及び親たちとの精神分析的な取り組みの重要性やら、それに精神分析的教育へのわれわれのアプローチにおいて臨床的な創造性を培うことへの責任についてもいっそうの理解が募ってまいりました。かくして、まさにマティのお蔭でわれわれはそのような幕開けへと導かれていったと言えるのであります。(訳出; 2015/07/15)

※原典; 【Mattie as an educator】 by Maragaret Rustin In; Collected
Papers of Martha Harris and Esther Bick.edited by Meg Harris Williams. (1987) Karnac.
